村上昭夫の肖像

小泉　とし夫

いったい〈肖像〉とはどんな意味をもつものなのか。広辞苑では「人間の容貌・姿態を写した画像または彫像」と説明しています。絵師によっていた肖像も、カメラの普及で安直に「容貌・姿態」を写すようになったが、「人間」まで写すのは難しい。本人だと思っていた肖像が別人に見えることがある。

かつて日本国民が明治天皇の実像だと信じていた「御真影」（肖像）は、実はお雇いイタリヤ人（エアドル・キヨソーネ）の描いた肖像画を、写真師丸木利陽が数十日かけて完成したものだったと『ミカドの肖像』（猪瀬直樹著・小学館刊）が伝えている。西洋の高貴な方々の肖像は、宮廷画家に「尊厳と威容と慈愛」（カリスマ性）を備えるように注文して制作されたものらしい。

ところで現代の作家には愛読者をとりこにする〈肖像〉がある。あるテレビ番組に出演したうつみ宮土理さんが、文学少女だった中学生のころ、芥川龍之介の写真をみてほおを寄せたいほどの衝動を覚えたと告白しました。

こうした写真は作家に密着するプロ写真家によって撮影され、作家の「人間」を見事にとらえた名作を遺しています。なかでも絶品なのは林忠彦の撮った太宰治の一枚でしょうか。それは銀座のバー・「ルパン」で撮影したものです。

カウンターの高椅子に座ってあぐらをかき、どこか憂愁の影が漂う太宰を、下方からワンショットしたポートレートです。このポートレートがあればこそ、桜桃忌にはおびただしい全国の女性ファンがほおずりし供養するものかもしれません。

わが『動物哀歌』の村上昭夫の肖像にも、太宰に劣らず、読者を魅了させずにはおかない写真が遺されています。

ほのかに、ヒューマンな「人間」がにじみでる写真の数々です。すべてがプロではなく素人の知人たちが撮ったポートレートばかりです。それでも昭夫の「人間」がごく自然に写されているのは注目されてよいことです。

昭和二年一月生まれの昭夫が、やっとお座りしたときから晩年の昭和四十二年に至るまでのアルバムが、日本現代詩歌文学館で開催された「没後三〇年企画展」で展示されました。岩手中学入学時、学徒動員出発時、満州から引き揚げ盛岡郵便局に就職した昭和二十二年の時までの写真は、穏やかな肖像で、涼やかな瞳ときりっと結んだ口元が印象的です。

それが昭和二十五年春に発病し、岩手サナトリウムに入院した二十六年より四十二年に至る昭夫の肖像は、それまでになかった笑みが浮かび、広くなった額がとても清らかです。この額には〈思考・判断・言語や自律機能〉をつかさどる前脳連合野が宿っているのです。『動物哀歌』の読者は、この額から発光されるものを感じとり、永遠に渡っていく「雁の声」を聞くのだと思われます。

昭夫は敗戦満州の極限状況から詩人と病気のタネを植えつけられました。病床で詩心が目覚め、永い闘病生活のなかで「死の眼鏡」を通して人間の営みを凝視しながら詩作しました。名著『動物哀歌』も満州体験から産み落とされたものに違いありません。

しかし昭夫アルバムには、満州時代の肖像が空白のままです。心ある読者は「空を渡る野犬」「氷原の町」「砂丘のうた」などや、未発表の詩稿の中から、未来を透視する〈肖像〉の輪郭を感じとられることでしょう。

雁の声

雁の声を聞いた
雁の渡ってゆく声は
あの涯のない宇宙の涯の深さと
おんなじだ
私は治らない病気を持っているから
それで
雁の声が聞こえるのだ

治らない人の病いは
あの涯のない宇宙の涯の深さと
おんなじだ

雁の渡ってゆく姿を
私なら見れると思う
雁のゆきつく先のところを
私なら知れると思う
雁をそこまで行って抱けるのは
私よりほかないのだと思う

雁の声を聞いたのだ
雁の一心に渡ってゆくあの声を
私は聞いたのだ

（詩集「動物哀歌」より）